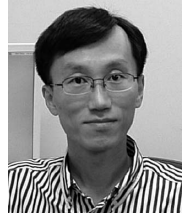


# 韓国と日本における天文学研究についての個人的な回想



著者: **Narae HWANG**

〈国立天文台光赤外研究部 〒181-8588 東京都三鷹市大沢 2-21-1〉

e-mail: narae.hwang@nao.ac.jp

和訳: 柏川 伸成

〈天文月報編集委員会〉

天文学はとても国際的な学問分野に成長した。多くの研究者が会議や観測などで短期間、あるいは仕事をするために長期間外国に訪れている。一方で、「外人」天文学者の研究のしかたを見ていると、時々驚かされたり、いらいらしたりすることもある。たぶんわれわれは、お互いの成果をよりよく知るためにも、お互いの天文学のやり方をよく理解する必要があるだろう。幸運にも私は、日本と韓国、とても似ているがやっぱり文化の異なる隣り合った二つの国で天文学研究をし、両国で多くの天文学者に会う機会に恵まれた。これは、東アジアの二つの大都市、東京とソウルにおける生活と天文学にまつわる個人的な回顧録である。両国の天文学コミュニティのよりよい未来への熱い期待を込めて。

안녕하세요. Hello. こんにちは. 私の名前は, Narae Hwang, ファンナレといひます. 私は韓国から来て, 現在, 国立天文台光赤外研究部で研究員として仕事をしています. 韓国のソウル大学で相互作用渦巻き銀河 M51 の星団についての観測的研究で博士号を取りました. 2008 年の 10 月に, 日本学術振興会の外国人研究員制度を利用して日本にやって来ました. 星団と星種族の測光的性質に大きな興味をもっていて, これらを通じて銀河の形成や進化を探りたいと考えています. 例えば, M51 の星団は, 伴銀河 NGC5195<sup>1)-3)</sup> との力学的相互作用のよいトレーサーとなっていますし, 局所銀河群に存在する異常に大きな星団のいくつかは, 銀河同士の相互作用や降着の結果<sup>4), 6)</sup> だと考えられます. これらの研究で, 私は HST や CFHT の MegaCam で取得されたデータを用いました. また唐牛 宏教授のおかげで, すばる MOI-

RCS の初期運用期に取得されたデータを解析する<sup>7)</sup>機会にも恵まれました. あかりプロジェクトの韓国協力グループにも参加し, NEP 領域の可視ソースカタログ<sup>5)</sup>を提供し, あかり CLEVL プロジェクト<sup>8)</sup>の IRC 観測計画にも携わりました. したがって, 私と日本との関係(訳者注: 原文では “in-nen” 「因縁」)はずっと前から始まっていたのです.

現在私は, 国立天文台で主に有本信雄教授といっしょに局所銀河群の星種族について研究しています. ほかに例えば, 銀河系の球状星団の観測プロジェクト, HSC/PFS の観測プログラム立案・検討, あるいは近傍銀河の星団形成についての ALMA 観測プロジェクト, などについて多くの日本人研究者と積極的にコラボレーションしています. 関わったプロジェクトにはできる限りの方法で貢献しようと努めています. でも, 時々で

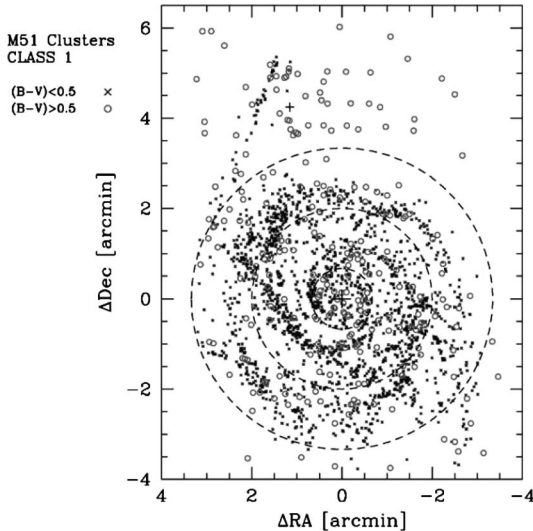


図1 渦巻き銀河 M51 における星団の分布. 赤い星団が領域全体に広く分布しているのに対し、青い星団は腕に付随しているのがわかる. 天文学者はこのような図を描いて銀河の構造を調べている. Hwang & Lee (2008) より転載.

すが限界を感じることもあって、特にすべての議論が日本語で行われているときには、完全についていくのは難しい！

2008年に国立天文台に来る前に一度だけ日本を訪れたことはありましたが、私の日本に対する印象は、もうすでに3年にもなる三鷹滞在中にほぼ培われたと言ったほうがよいでしょう。時間が経つのは本当に早い！国立天文台やその周辺の三鷹に来て、まず最初に印象的だったのは、たくさんの木々が生い茂り、平坦な土地のあちらこちらに狭い小道が走り、美しく小さな家々が点在する穏やかな風景でした。それは昔も今も「平和」そのもので、私の家族はいっぺんに好きになりました。それはひとえに、私たちの住んでいたソウルという街は、高層ビルやアパートメント（日本で言うところの「マンション」）が立ち並び、その間を人や車が1日中、365日毎日せわしく行きかうところだったからかもしれません。

日本の多くの方々は私たち家族にとっても親切

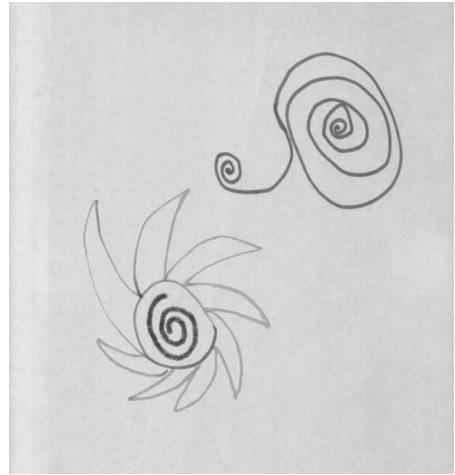


図2 数年前に息子の描いた銀河. 天文学者の描いた図に比べて、よっぽど生き生きとして、示唆に富むものになっている. 彼は今、日本の小学校に通う3年生だ.

に接してくれました。私たちは、自信をもって東京は第2の故郷だと言えますし、今や日本での生活のいろいろな側面に親しみを覚えています。しかし、ものの考え方や行動のとり方について、日本人と韓国人の間いくつか相違があるのも事実です。日本人は、どちらかというより細かいところ（時には複雑なところ）や形式が気になるようで、いろいろな異なる需要を洗い出したうえで、それらに対して完璧に（訳者注：原文では“pittari”）答えようとしています。私が大好きな多種多様のビールや食事やその他の製品が日本にあるのは、これが原因だと思います。また同じ理由で、最終的には便利になるであろう「新しいもの」（例えば、バスや地下鉄で使うプリペイドカードやICカード）を、最初に受け入れて使いこなすまでには、(かなり)多くの時間を費やすのだと思います。

グローバルな研究分野であるはずの天文学についても、このユニークな文化的傾向は色濃く影響を与えていると思います。日本の天文学コミュニティはきっちりと組織され、さまざまなプロ

ジェクト, ミッションが密接に関係していることを知り, 日本の典型だと感じました. 物的人的リソースが潤沢にあったことのみならず, 非常に発達した組織がそこにあったからこそ, 日本の天文学コミュニティは発展したのではないのでしょうか. 日本に比べて, 韓国はたった 200 人ほどの博士号取得者をかかえる小さな天文学コミュニティですが, 今, 劇的にかつ動的に変わりつつあります. 最近では, GMT, SKA, LIGO といった多くの国際プロジェクトにも積極的に参加し, 推進しています. その中には, もちろん日本とのコラボレーションも含まれており, あかりや SPICA プロジェクト, 日本の VERA と韓国の KVN チームが共同で牽引する EAVN プロジェクトなどもあります.

このような日本と韓国の間での共同研究は両国の天文学コミュニティにとって有益であると私は信じていますし, もっと活発に進めるべきだと思います. その一環として, 私は 2009 年に平泉で開催された日韓共同天体物理ワークショップの実行組織メンバーにも加わりました. このワークショップには, 両国から 50 名の天文学研究者が集い, 昼夜を問わず(!), 熱い議論が繰り広げられました. お互いに関心の深い研究分野が数多くあることを認識するよい機会にもなりましたし, 将来, 具体的な共同研究にも発展することでしょう. 私自身は, この日本滞在中, そしてそれからずっと先も, 日本と韓国の間でのわくわくするような新しい共同研究を促進し, そのために努力したいと考えています.

この原稿を書く機会を与えてくださり, この「たどたどしい」文章を和訳していただいた天文月報編集委員会の柏川伸成氏に感謝します. 私の経験からも, 翻訳というのはほぼ全く新しく執筆するのに近く, ストレスと責任感ののしかかるものだということを知っています. ありがとうございます.

## 参考文献

- 1) Hwang N., Lee M. G., 2006, ApJ 638, L79
- 2) Hwang N., Lee M. G., 2008, AJ 135, 1567
- 3) Hwang N., Lee M. G., 2010, ApJ 709, 411
- 4) Hwang N., et al., 2005, IAU Colloq. 198, 257
- 5) Hwang N., et al., 2007, ApJS 172, 583
- 6) Hwang N., et al., 2011, ApJ 738, 58
- 7) Kim M., et al., 2009, ApJ 703, 816
- 8) Lee M. G., et al., 2009, ASPC 418, 241

### Personal Memoirs of Doing Astronomy in Korea and Japan

Narae HWANG

*Optical and Infrared Astronomy Division,  
National Astronomical Observatory of Japan, 2-  
21-1 Osawa, Mitaka, Tokyo 181-8588, Japan*

Abstract: Astronomy has become quite an internationalized field of study and many astronomers visit foreign countries on a short term (for conferences/observations) or long term basis (for pursuing careers). In the meantime, we find ourselves sometimes surprised and sometimes frustrated by witnessing how 'gaizin' astronomers are doing astronomy and science'. Maybe we need to understand each other's way of doing astronomy to better understand their scientific products. I have been lucky to do astronomy in Japan and Korea, two neighboring countries with quite similar but still different cultures, and to meet many astronomers in both countries. This is a personal memoir about life and astronomy in two major East Asian cities, Tokyo and Seoul, prepared with a strong hope for better futures of both astronomical communities.